

中山晋平



北信州の叙情的な風景が育んだ晋平メロディ

田んぼの畦道に咲く野の花、穏やかな陽光、田園地帯を豊かに潤す清流……。中山晋平は、明治20年、現在の中野市大字新野に生まれました。新野は、なだらかな丘陵地に広がる集落で、北に高社山、西には北信五岳と呼ばれる山々が連なり、近くの「ぼんぼこの湯」からは夕暮れ時、夕日に照らされて、周囲の山々の漆黒のシルエットが眺められます。



晋平は、このおらかな自然の懷で伸び伸びと少年時代を過ごし、小学生時代から秋祭りの笛の能手として音楽の才能を開花させていきました。口ずさむと懐かしく、ほのぼのと心温まる晋平メロディの源流には、生まれ育ったこのふるさとの情景があるのです。

歌うことの素晴らしさを教えてくれた日本のフォスター“



高等小学校を卒業後、一時は代用教員として小学校に勤めていた晋平ですが、音楽の夢を叶えるために上京。早稲田大学教授であり、新劇界で注目されていた高村抱月のもとに書生として住み込むと同時に、東京音楽学校に通い始めました。晋平が、初めて世間の脚光を浴びるのは、大正3年のことです。抱月が女優松井須磨子らと旗揚げした芸術座の第3回公演、トルストイ原作の「復活」の劇中歌として「カチューシャの唄」を作曲。歌は大ヒットし、その後作られた「ゴンドラの唄」「さすらいの唄」とヒットを重ね、流行作家としての道を歩むようになります。

晋平の軌跡をたどる中山晋平記念館

「船頭小唄」「波浮の港」などの歌謡曲、「證城寺の狸囃子」「シャボン玉」「背くらべ」などの童謡から新民謡、校歌など、晋平が生涯を通じて作曲した作品は、およそ3000曲。そのメロディは今もなお色あせ



「日本のフォスター」とも呼ばれています。

カチューシャの唄	ゴンドラの唄
頂上九吉	紅屋の娘
兎のダンス	春の雨
雨降りお月	銀座の柳
あの町この町	東京行進曲
背くらべ	出船の港
アメフリ	
てるてる坊主	
シャボン玉	
木の葉のお船	
證城寺の狸囃子	
砂山	
東京音頭	
旅人の唄	
波浮の港	
船頭小唄	
毬と毬さま	
銚をおさめて	



高野辰之



生家近くに今も見られる唱歌「故郷」の原風景

♪ 兎追ひし かの山 小鮒釣りし かの川

兎追いは、自然豊かな山村の冬季間の子ども達も加わった村総出の行事でした。唱歌「故郷」は、作詞した高野辰之が、少年の日に友達と野山で遊んだ情景を懐かしんで作ったものです。高野辰之が生まれたのは、明治9年。生誕地の中野市大字永江は、眼下に斑川が流れ後方をなだらかな山に囲まれました。棚田や畑が広がるのどかな山裾にあります。清冽な水が流れる斑川、辰之生家から眺められる大平山などの里山が、「故郷」の舞台です。今も山里を少し歩くだけで、辰之が生まれ育った頃の風景に出会うことができます。

♪ 夢は今もめぐりて 忘れがたき故郷
辰之の歌からは、ふるさとを遠く隔ててなお絶ちがたい懐旧の念を感じるすることができます。



国文学者として偉大な功績を残す

厳しい父のもとで育てられた辰之は、農業の手伝いをするかたわら、土蔵に隠れて本をむさぼり読むという向学の志にあふれた少年でした。下水内高等小学校を卒業後、母校の永田尋常小学校の代用教員を勤め、その3年後には長野県尋常師範学校(現信州大学教育学部)に入学。この頃から、千首あまりの和歌を作っていたといわれます。26歳の時、上田万年文学博士(円地文字の父)を頼って上京。博士のもとで国語、国文学の研究に没頭し、やがて「文部省国語教科書編纂



日の丸の旗
紅葉
春が来た
春の小川
故郷
朧月夜

唱歌、また、全国100余校の小学校、高校、大学の校歌や中山晋平作曲の「飯山小唄」を作詞しました。明治後期からは、「日本歌謡史」「江戸文学史」「日本演劇史」を次々と書き上げ、これらは、高野辰之の三大著作として近代の国文学に大きな功績を残しました。大正14年に東京帝国大学から文学博士の学位を、昭和3年には帝国文学士院賞を授与されています。

美しい庭園の中にたたずむ高野辰之記念館

かつて高野辰之が学び、教鞭を取った永江学校・永田尋常小学校の後身の永田小学校の跡地に高野辰之記念館があります。敷地内には小川が流れ、辰之の銅像がたた



ボランティアのグループも、美しいふるさとを皆様にご案内(60分程度)11月までの期間です。